



移住者特集

もせうしで暮らす人たち

少子高齢化、人口減少が進む地方から都市部への人口流出は、新型コロナウイルスの感染拡大を契機に新たな転換期を迎え、全国的に人口密度の低い「地方移住」に注目が集まりました。

とはいえ、国立社会保障・人口問題研究所（東京都）が2023年12月に公表した「日本の地域別将来推計人口」によると、空知管内24市町の総人口は2020年から2050年の30年間で、ほぼ半分にまで減少する見通しです。

妹背牛町においても、他の自治体と同様に人口減少が深刻で、20年に2693

人いた人口は50年に988人まで減り、減少率は63.3%に上ると推計されています。

今回の移住者特集では、妹背牛町に移り住んで3年以内の方を対象にインタビューを実施。移住のきっかけや住み心地、利用しやすかった町の移住・定住支援事業などを聞きました。

妹背牛に住み慣れた地元の方たちにとっては何気ない日常も、移住された方たちには魅力の一つになることも。その新鮮な視点を生かして妹背牛の新しい魅力を発掘し、今後のまちづくりのヒントを探ります。

昨

年3月に近隣町から妹背牛町に移住した福岡慎太郎さん

は、北空知近郊のヨサコイチーム「もせうしRIMUSE（りむせ）」のサポートメンバーです。

今年も旗振り役を担い、札幌市・大通公園周辺で6月上旬に開催された「YOSAKOIソーラン祭り」の会場で踊り子たちの演舞を盛り上げました。

りむせは、北空知唯一のヨサコイチーム。福岡さんは「会話のきっかけにもなって、地域の人たちと打ち解けることができます。別のイベントで共演した『もせうしこがね太鼓』の皆さんとも仲良くなれました」と、笑みを浮かべます。

大衆の視線を集めた本番。6月9

日はステージとパレードの計5回の演舞を披露しました。曲調や会場の雰囲気に合わせて、旗の振り方は毎回アドリブ。演舞が終わると、大きな拍手が送られました。

一緒にヨサコイを楽しむ娘は、JR函館本線を利用して滝川市内の高校に通う2年生です。

「電車通学はもちろん、家具・家電量販店への買い物も車で1時間以内の距離」と、妹背牛町の住みやすさの一つに、交通アクセスの良さを挙げる福岡さん。「交通の便が良いので、若い子育て世代にたくさん住んでもらえる町になればうれしいですね」と、話しています。

移住 × 演舞



2023年3月に移住した福岡慎太郎さん。YOSAKOIチーム「もせうしRIMUSE」では、旗振りを担当しています。



6月9日、札幌・大通公園パレード会場
第33回 YOSAKOI ソーラン祭り

動

物が好きな市川梨花さん
(埼玉県所沢市出身)は

酪農学園大(江別市)への進学を機に、北海道での生活を始めました。卒業後はJA北いぶき妹背牛支所に就職し、妹背牛町へ移住。のどかな田園風景が広がる妹背牛での生活に「静かで暮らしやすいまち」と、印象を語ります。

米穀農産課兼花卉蔬菜課に配属された市川さんの主な仕事は、経理事務のデスクワーク。「一日でも早くパソコン操作に慣れて、優しい先輩たちのようなJA職員に成長したいです」と、張り切っています。

愛犬との散歩コースがお気に入りスポット



職場を離れると、愛犬との散歩が楽しみ。オスのマルチーズ「ポルテ」(3歳)を連れていく、自宅近くの散歩コースが妹背牛町内のお気に入りスポットで、「元氣いっぱいなポルテがストレスなく散歩できる環境がいいですね」と、広々とした道を20分かけて歩くことが日課です。市川さんは「空気もお米もおいしい」という妹背牛町での新生活を楽しんでいます。

移住 × 仕事



2024年2月に移住した市川梨花さん。職場の先輩にパソコン操作を教えてもらいながら、デスクワークに奮闘中。

妹

背牛町出身の坂井美津代さんは昨年6月、住んでいた東京都から妹背牛町に帰ってきました。20歳で故郷を離れてから50年ぶりの帰郷。稲苗が青々と育つ景色に「やっぱり、妹背牛は田んぼ。あ～帰ってきたなあ～」と懐かしさを覚えたそうです。

転勤族だった夫・晃二さんと結婚し、札幌市、新潟県、東京都に移り住みました。「妹背牛は公園が少ない印象。お店が減って寂しいけれど、ゆったりとした感じが住みやすいですね」と話しています。

引っ越し費用を支援する町の助成金で、北海道の冬に欠かせないストーブを購入。冬場の運動不足や健康に配慮し、保健センターで開かれている「サーキットトレーニング」に通い始めました。

「無理なく運動ができる」と、毎週のサーキットトレーニングに参加していると、新しい友人との会話を楽しむ時間も増えました。

移住した当初、地元に残っていた友人と町民の方に温かく迎え入れてもらったことに「とてもうれしかったです」と、感謝しています。

移住 × 健康



坂井さんは2023年6月に帰郷。健康の秘訣は、毎週のサーキットトレーニングで知り合った友人と体を動かすことです。

移住 × 育児



遊水公園うらら内の複合遊具で遊ぶ中川さん一家

子

育てに奮闘する中川梨乃さんは3歳の男の子と生後8カ月（取材当時）の女の子を育てる2児の母親です。深川市内の会社で働く夫・恭一郎さんと現在の家に移り住んで、もうすぐ1年。家族4人で幸せな時間を過ごしています。

保育料の無償化など、子育て支援に手厚い妹背牛町について、梨乃さんは「ふだんの食費や洋服代を除いて、幼い子の教育にほとんどお金がかからないことが魅力ですね」と、笑顔で話します。

結婚・出産に伴い、町から支給された助成金の使い道は、冬場の灯油代に充てたという梨乃さん。「物価が高騰していたので、とても助かりました」と、振り返ります。

新鮮な野菜が収穫されるこの季節は、農産物直売所「SUN工房あぜみち」で地場産品を買い求める機会が増えるといい、中川さん一家の栄養バランスのとれた食卓を支えています。

商工会のお得なスタンプラリーにも参加しているという中川さん夫妻。休日には、夫婦で「食事処 紀州」や「炭焼き杜」などに足を運び、食事を楽しんでいます。

恭一郎さんのお気に入りには、妹背牛の夏を彩る「町民まつり」や、食べ歩きを楽しむ「遊歩市」など温かい雰囲気のある祭り。「サウナが好きなので、子どもが大きくなったら一緒にペペルに行きたいですね」と、声を弾ませます。

中川さん一家は妹背牛に住んで家族が増え、にぎやかで有意義な妹背牛ライフを満喫しています。

妹背牛町の移住希望者向けの助成金

事業名	引越し費用支援	民間賃貸住宅家賃支援	移住体験等支援
対象	町内に住宅を購入、もしくは賃貸住宅に入居するために町外から転入した方。	町内の家賃が月 35,000 円以上である民間賃貸住宅に入居している方。	本町へ移住を検討しているもしくはテレワークを行う方で、事業の対象期間中に7日間以上14日間以内で体験などを行い、妹背牛温泉隣のムービングハウスに宿泊する方。
内容	世帯構成別で下記金額の商品券を交付。 単身世帯 5万円 夫婦等世帯 8万円 子育て世帯 10万円	単身世帯 月額 6,000 円 夫婦等世帯 月額 8,000 円 子育て世帯 月額 10,000 円 最大 36 か月分の商品券を交付。 申請時期：1/10～2月末日	1泊 3,000 円の助成（対象期間は7月から8月及び12月から1月の4ヶ月間以外の月）。